高麗太祖の薨後に於ける王位繼承上の一悲劇

文學士　池内　宏

後晋の天福八年、高麗の太祖王建薨じ、長子武位を襲ぐ。武は太祖が弓裔の水軍將軍として半島の西南羅州に出で鎮せし時、木浦の人吳氏の女を幸して生みたるものなり。太祖が弓裔に代りて新朝を開くに及び、立てゝ儲貳となさむと欲せしも、母の側微なるを以て位を嗣ぐを得ざるべきを恐れ、故笥に柘黃袍を盛り、之を吳氏に賜へり。吳氏以て大匡朴述熙に示しゝかば、述熙、太祖の意を揣り知り、武を立てゝ正胤となさむことを請ふ。因つて太祖即位の四年、冊立の命あり。正胤は太子の稱なり。二十六年五月、太祖薨ずるに臨み、述熙に托するに軍國の事を以てし、武を扶立して輔佐の任を盡さしめ、且つ内外の庶僚に遺命し、並に東宮の處分を聽かしむ。武、位に即く、惠宗是れなり（高麗史卷九十二、朴述熙傳。同卷八十八、莊和王后傳）。

然るに新王の宮廷は忽ち疑問に滿ちたる陰謀の妖雲に覆はれたり。太祖に二十五子あり、吳氏莊和王后の生みたる惠宗を長とし、劉氏忠州の人莞達の女、神明王太后の出なる堯後に定宗及び昭後に光宗等之に次ぐ。さて太祖以來六朝に歷仕したる崔承老は、惠宗一代の政跡を論じて曰く、「惠宗久在二東宮一、累二經監撫一、尊二禮師傅一、善二接賓僚一、由レ是令名聞二於朝野一、及二初即レ位、衆擧欣然、時有レ人譖二定宗兄弟一、（堯及び昭）謂レ有二異圖一、惠宗聞而不レ答、亦無レ所レ問、恩遇愈豐、待レ之如レ初、故人皆服二其大度一、既而不レ修二德政一、過二惜身命一、左右前後常以二甲士一相隨、

蓋爲疑レ人太甚、大失二爲レ君之體一。加以偏二賞將士一、恩澤不レ均、故內外怨嗟、人心携貳、又即位踰年、便致二沉痾一、牀枕之間淹延歲月、於レ是朝臣賢士不レ獲レ近レ前、鄉里小人常居二臥內一、厥疾彌篤、嗔恚日增、三年之間民不レ見レ德、至二于晏駕之日一、粗得レ免二其橫禍一、可レ不レ痛哉」と（高麗史卷九十二、崔承老傳）。所謂人ありて堯と昭とに異圖あるを謂せりとは、王規の企てたる逆亂を指したるにて、其の事實は詳かに王規傳（高麗史卷百二十七）に見ゆ。規は廣州の人、太祖に事へて大匡となり、二女を太祖に納れて第十五妃及び第十六妃となす。十六妃一子を生み、廣州院君といへり。惠宗二年、規、王の弟堯と昭とに異圖あるを謂す。惠宗、其の誣罔なるを知り、二弟を恩過すること愈々厚かりしが、司天官崔知夢奏して曰く、流星紫微を犯す、國必ず賊あらむと。惠宗之を以て規が二弟を害するの應なりとし、乃ち長公主を昭に妻はし、以て其の族を強くせしかば、規、其の謀を行ふを得ざりき。規又た廣州院君を立てむと欲し、一夜王の睡熟せるを伺ひ、其の黨を遣はして潛かに臥內に入らしめ、將に大逆を行はむとす。惠宗之を覺り、一拳賊を斃し、左右をして曳き出でしむ。而して復た問ふ所なし。又た一日惠宗病みて神德殿に在り、知夢又た奏すらく、近く將に變あらむとす、宜しく時を以て移御すべしと。惠宗潛かに別殿に徙る。規、夜其の黨を率ゐ、壁に穴して寢に入る。王已に在らず。規、知夢を見、劒を拔きて罵り、惠宗の寢を移せるは必ず其の謀なりとなす。知夢竟に言はず。規乃ち退く。惠宗、規の所爲なるを知りしも、亦た之を罪せざりき。王規傳は規の兇逆に關して斯かる事實を擧ぐ。要するに規は惠宗を弑し、且つ其の二弟を害して廣州院君を立むとしたるものなるが、惠宗の之を知つて其の罪を問はざりしは尤も疑問とすべし。崔承老が惠宗の失德を咎め

て「德政を修めず、身命を過惜し、左右前後常に甲士を隨へたり」云々と言へる所以は茲にあるべく、規を誅せし定宗（堯）に對しては「自二定宗一至今三十八年、其間洪祚之不レ絕、亦定宗之力也」との讃辭を呈せり。

然らば惠宗は何故己が身命を危くせむとしたる逆臣を誅することをなさゞりしか。惠宗世家を見るに、二年の條に特別なる月日を示さずして「大匡王規譖二王弟堯及昭一、王知二其誣一、恩遇愈篤、規又使下二其黨一穴レ壁入中王寢內上、謀レ作レ亂、王徙避レ之、不レ問」といひ、次に九月に係けて「王疾篤、群臣不レ得二入見一、愼小常侍レ側、戊申、薨二于重光殿一、在位二年、壽三十四、王氣度恢弘、智勇絕倫、自二王規謀逆之後一、多レ所二疑忌一、常以二甲士一自衛、喜怒無レ常、群小並進、賞二賜將士一無レ節、內外嗟怨」といへり。之を上の崔承老の言及び王規傳の記事に照合すれば、惠宗は王規の兇暴に對してひたすら自衛に力め、其の不安の間に疾を獲て、九月戊申の日薨ぜしが如し。而して次弟堯（定宗）は即日即位し、翌日王規の誅に伏せしことは、定宗世家に「惠宗二年九月戊申、群臣奉レ王即レ位、己酉、王規謀レ逆伏レ誅」とあるにて知らる。さて惠宗と朴述熙との關係は既に述べたる所の如く、「太子を扶立して善く輔佐せよ」との太祖の寄託に對し、述熙は一に遺命の如くしたりといへば、王規の兇暴を逞うするに當り、彼れが惠宗を庇護したるものゝ第一人なりしは之を察するに餘りあり。且つ彼れは性勇敢、嗜んで肉を啗ひ、蟾蜍螻蟻と雖も皆な之を食ふ、年十八にして弓矯の衛士となり、後太祖に事へて累々軍功を樹てたりといふ（高麗史卷九十、朴述熙傳）。惠宗が左右前後常に甲士を隨へたりといふは、必ず述熙等の率ゐし兵なるべし。傳に曰く、「及二惠宗寢一レ疾、述熙與二王規一相惡、以二兵百餘一自隨、定宗疑レ有二異心一、流二于甲

串」、規因矯「命殺」之」と。述熙の王規と相惡みしは固り個人的の關係にはあらざるべく、百餘の兵亦た己を護るが爲めに隨へたるにあらざるべきなり。然るに定宗、疑つて以て異志なりとなし、述熙を甲串（江華島の東岸）に流しゝは何ぞや。余は此の一事を捕へて惠宗兄弟の互に嫉視したる關係を推想せざるを得ず。王規は彼等兄弟に共通したる逆臣なるに、其の規を惡める述熙がやがて共通の忠臣たること能はざりしは、一にこれが爲めならざるべからざればなり。惟ふに惠宗は夙く太祖の正胤たりしも、母の側微にして嗣立の難かるべきは當初より顧慮せられし所。而して太祖は特に內外庶臣の東宮の處分を聽くべきを遺命したる（大祖世家）、其の襲位の後異腹の弟なる定宗と協はざりし形跡ありとせば、そは定宗に王位を競望する念ありしを意味するものなるべし。論じて茲に至り、惠宗が王規の罪を問ふことなく、而してひたすら自衛に力めし其不可思議なる事實を考ふれば、蓋し所以ありとすべく、王は久しからずして王位の競望者の先づ逆臣に斃さるべきを期待し、其の機の至るに及びて逆臣を誅し、依つて以て自ら保てる王位を安固ならしめむとしたりしに似たり。崔承老が王の薨去に關して「三年年之間民不レ見レ德、至二于晏駕之日一、粗得レ免二其橫禍一、可レ不レ痛哉」と言へるを玩味するも、亦斯く推測するの不當にあらざるべきを覺ゆ。既記の如く王規傳に據れば、初め王は二弟を譖せし規の言に耳を假さず、又た規が彼等を害せむとするを知りては長公主を昭に妻はし、以て其の族を强くしたりといふ。されどもこは恐らく誠意に出でたるにばあらずして、平生離乖したる二弟に對し、王自身が規の教唆者にる嫌疑を免れむとしたる權宜の處置なりしが如し。

次に王規の誅戮が如何なる機會に遂げられたるかを考ふるに、時日の點に於て惠宗薨去の翌日な

りしは上文世家の記事に依りて明かなれども、其等の事件の相互の關係につきては、史上の記載は甚しく透徹を缺く。王規傳に曰く、「初惠宗疾篤、定宗知二規有二異志一、密與二西京大匡式廉一謀レ應レ變、及二規將一レ作レ亂、式廉引レ兵入衛、規不二敢動一、乃竄二于甲串一、遣レ人追斬レ之、誅二其黨三百餘人一」と。王式廉傳の文亦た略同じ。王式廉は太祖の從弟にて、當時西京（平壤）に鎮せしもの、定宗は密かに之と謀り、其の兵を率ゐて來り衛るを待ちて突刹の間に規を誅するの擧に出でしなり。固より事件の性質上若干の日數を隔てゝ然りきとは思はれず。（規の甲串に竄せられしと其の斬られしとは、日を異にしたりしならむも）。然らば式廉の入京と惠宗の薨去とは略其の日を同じくせしこと殆ど疑を容れざるに、王規傳には其關係を示せる語なし。而して式廉入衛の際に於ける規の行動に關して「規將作亂」といへるは、少しく抽象的に過ぐるの感あり。又た王規傳の上の一條の前文に曰く、「規嘗惡二大匡朴述熙一、及二惠宗薨一、矯二定宗命一殺レ之」と。されども惠宗の薨去と式廉の入京と規の捕竄とが殆ど同日に起れりとせば、規が其の間に於て定宗の命を矯めて述熙を殺すの暇あるべきか。且つ規を誅するの擧と必ず關係あるべき惠宗薨去の事實が、其の條には記るされずして、斯かる疑はしき記事に配せられしも怪しむべし。要するに惠宗の薨ぜし九月戊申の日、群臣定宗を奉じて位に即け、其の日定宗は式廉の入京を迎へて王規を捕竄したりと思はるゝに、史は其の關係を明記せざるなり。而して崔知夢傳（高麗史卷九十二）を檢すれば甚だ奇異なる記事を得。曰く、「定宗即レ位誅レ規、褒二知夢密奏二事機一、賜二臧獲鞍馬・銀器一」と。既記の如く知夢は屢々惠宗の危難を救へるもの常に王の左右にありて其の耳目たりしや疑なし。然るに規を誅せし定宗が、密かに事機を奏せりとて知

夢の功を賞せしは何事ぞ。定宗・惠宗の互に嫉視したるを思へば、こは明かに知夢の惠宗を裏切れるを示すものにあらずや。秘筐を開くの鍵は是に至りて握られたり。余は曖昧なる史筆の幕を隔てゝ一大悲劇の演ぜられしを推想し、定宗即位の前後の事情を次の如く說明せむとす。定宗は惠宗が故ら規を誅せずして、其の姦計を縱にせしむるに堪ふる能はず、九月戊申の日を期して西京の兵を入衛せしめ、ひとり規のみならず、惠宗の腹心述熙を捕竄し、且つ豫め知夢を籠絡して惠宗を暗殺せしめしなるべし。而して其の日位に登る、世家に「群臣奉レ王」の語あるは味ふべきなり。所謂異志あるを疑つて述熙を甲串に流しゝ定宗は、又た規と相並べて之を追斬せしめしなるべく、必ず規の所爲にはあらじ。世家幷に諸臣の傳に累見する惠宗の「寢疾」「疾篤」は曲筆にて、崔承老の「即位踰年、便致二沉痾一、牀枕之間淹延歲月」と言へるも亦た然り。承老又た曰く、「定宗在二藩邸一時、早有二令聞一、及二惠宗寢レ疾彌留一、宰臣王規等潛有レ所レ圖、窺二覦王室一、定宗先認レ之、密與二西都忠義之將一定レ計而爲レ備、及二內難將一レ作、衛兵大至、故姦計不レ成、群兇受レ誅、雖レ由二天命一、亦在二人謀一、豈不レ偉歟」と。前には「有レ人譖」定宗兄弟一」といひ、こゝに王規の名を揚げて其の別人なるを粧ひ、且つ惠宗の薨去と王規の誅戮とを各別に記るして其の同時に起りしを示さず。曲筆の形跡掩ふべからざるものあり。王規の異圖を以て先づ定宗の認むる所となし、內難將に作らむとして衛兵大いに至れりといふが如き、事實の眞相に對して幾何の價値ある文字にもあらざるなり。